
星に願いを...してみる？

トムトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星に願いを…？

【Nコード】

N1008BA

【作者名】

トムトム

【あらすじ】

前作 I want to stay with you の続編です。

話は週明けの月曜日から始まります。

流星群を見よう 真美1

「まあみいちゃん。どうだったの？ねえ」

朝の教室。教室にいた私の目敏く見つけた歩美が週末の事を聞いてきた。

「えっ、別に。月が欠けて復活してたよ。自然って凄いな」

「あれ？旦那から求婚されたんでしょ？」

確かに哲からはプロポーズされたよ。でも知っているのは互いの親だけはず。

「…誰に聞いたのかな？そちらはどうだったのかしら？」

「あははは…。またアリバイに使わせてね」

形勢不利になった歩美は強引に話を終わらせようとしている。

ふうん、どうやら何かをやらかしたな。

「何？肉食系女子ではつくりと食べちゃったんだ？勝負下着いらなかったじゃない」

「誰が肉食系ですって！！」

歩美が声を荒げた。大丈夫、歩美が肉食系でハンターで策士なのは知っているからね。

しかも狙った獲物は絶対に手放さないし…私も哲もそんな一人なんだろうね。

「…しなかったの。誰かさんと同じように月食見て寝オチだったのよお」

急に歩美の声が小さくなった。

「珍しい大失策ね。でも年末まではイベントは目白押しだしね」

「分かってる。今度は絶対にものにするんだから」

歩美は彼氏がいる教室の方向で銃を撃つ真似をした。

絶対しとめる気なんだ。ちょっと冷静になって考える。

この歩美の行動って…ふつうは男の子がすることじゃないんですか？

第一、モノにするって。私も哲に言われたけれども…やっぱり女の

子が言うセリフじゃないよ。
そんな歩美の彼氏に向かって私は手を合わせた。無事に穏やかに済みますように。

「で、木曜日に今度は流星群を見るんだ」

「ふうん、でも婚約者でしょ？何しても問題ないじゃない」

「なんで？」

「不純異性交遊じゃないでしょ？」

歩美が言った発言でクラスの皆が一斉に私たちを見た。

「えっ？」

「婚約？」

「結婚？」

「ちよつと、何があつたのか話しなさいよ」

皆に囲まれて私は渋々週末の顛末を話すしかなかったのだった。

「はあ」

「真美だけは、お子様ランチだと思つたのに」

「絶対領域があ」

皆言いたい放題に言われる。まあ、概ね好意的なんだけどもね。

「あれだけべつたりだったのに、告白して無かつただなんて」

「だったら俺らだつてお願いできたんじゃないか」

「うちの高校の妖精があつさりと永久就職まで内定取られた」

内容によつては何かすごく微妙な表現だったりするんですが。

「人の恋愛事情の前にお前らには大切なものがあるだろう？」

HRの時間になつたので担任があきれ果てた顔をして皆を見ている。

「今日から皆の大好きなテストの結果が分かるつて言うのに」

「まあ、俺の教科に限つて言えば追試者なんていないがな」

私たちの担任は体育教師。滅多に追試なんて発生しない。

「悪いが、早速テストを返すぞ」

と言って先生はテストを返し始めた。クラスがざわめきはじめる。

「そうそう、今回は追試は金曜日に一気に行うからな。まずは追試と判が押されたら」

担当の先生のところへすぐに行くように」

今日は特別日課。1日で全教科が帰ってくる。そこから金曜日の追試までを過ごすのだ。

「明日からは3者面談だからな。授業は午前中だからな」

「えええ」

「いいよお。そんなの」

「お前ら、いい加減に進路決めておけよ」

と言い捨てる。担任は教室を出て行った。

今日の授業は30分1コマ。先生が来て、一人ずつテストを返して、その後解説付きの

回答を配って皆が間違えが多かった所を説明する。

そして最後に、追試になった人に追試の範囲を発表する。

もちろん、同じテストなんて事はしない。でもその為に、面談のある3日間は

追試対策の授業を受ける。追試がない人は自由に出入りができる。

私たちにとっては天国と地獄になる。この気忙しい授業割と日程はようやく慣れたところだ。

ちなみに3学期は追試よりもレポートが多い。卒業式があったりして忙しいものね。

お昼休み。一気に戻ってくるずっと先生のターン状態を何とかかわしているだけでぐったりな私達。

「どう？金曜日に登校しそう？」

歩美は恐る恐る私に聞く。

「うーん、多分大丈夫だと思うよ。」

「そうだよな。学年トップ3の常連だものね。進路どうするの？」

「やっぱり先生を目指してみようかなと思って」

「聞かなきゃ良かったよ。旦那と一緒にいたいんだ」

「じゃなくて、頑張つてできたときのいい顔を私も見てみたいなんて。

ずつといい顔を見せる側なんだもの」

お弁当のプチトマトを私は口に放り込む。

「それよりも…私数学が…どうしよう」

歩美はどうしても数学が越えられない壁らしい。雷より怖いものなのかもね。

「愛するダーリンに聞いてみたら？」

「聞いても自分本位な教え方なんだもの。絶対に聞かないの」

歩美はふてくされて私のお弁当からハンバーグを奪う。

「ちよつと。何で人のものを食べるの？」

私はむくれて歩美に抗議する。

「だって、コレ真美が作った豆腐ハンバーグでしょ？おいしいに決まってるもの」

確かにお弁当は高校に入ってから自分で用意している。

「歩美もお料理したら？楽しいよ？」

数学の次に残念なのが調理実習な歩美に言ってみた。

「だっておいしくないんだもの」

申し訳ないけれども、歩美が作るものは何故か不味い。

彼氏に手作りのものを出したことはないことは容易に想像できる。

でも、本人はどこに原因があるのか知らない。

「あんたの場合は、どんぶり勘定のアレンジャーだからだよ。ちゃんと計れば

ちゃんと食べられるものが出来上がるの。分かる？」

そう、卵焼きに殻が混じっているのは基本だから。

「そういうものなの？面倒臭いなあ」

「そんなんじゃケーキなんて無理だからね」

私は会えて冷たく言い放した。毎年、無茶ぶりケーキを焼かされてた過去と決別したい。

そう、今年は哲のためだけにケーキを焼きたいもの。

「分かった。頑張ってみる」

私は更に歩美の彼氏に向かって手を合わせた。鋼鉄の胃袋の持ち主でありますように。合掌。

流星群を見よう 真美1（後書き）

真美は実は学年トップ3の常連。歩美は文系限定で成績がいいとしておきます。

追試はいやですよ。私も本当に嫌でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1008ba/>

星に願いを...してみる？

2012年1月2日10時45分発行